EDWARD H. SCHAFER
THE DIVINE WOMAN
DRAGON LADIES AND RAIN MAIDENS
IN T'ANG LITERATURE

神女

唐代文学における龍女と雨

エドワード・H・シェーファー 著
西脇常記 訳

東海大学出版会

神女

唐代文学における龍女と雨女

エドワード・H・シェーファー 著
西脇常記 訳

東海大学出版会

西脇常記（にしわき・つねき）

1943年上海市に生まれる
1975年京都大学大学院博士課程修了
専攻—中国思想史
現在—京都大学文学部助手

神　女　唐代文学における龍女と雨女

1978年11月25日　第1刷発行

訳者　西脇常記
発行者　山田　渉
印刷者　三浦丈夫

発行所　東海大学出版会　東京都新宿区新宿3の27の4東海ビル
電話03（356）1541（振）東京0-46614

印刷所　港北出版印刷
製本所　石津製本所

3098-0460-5110

フィリスへ

凡　例

一、本書は、Edward H. Schafer, The Divine Woman : Dragon Ladies and Rain Maidens in T'ang Literature, Berkeley and Los Angeles, 1973 の全訳である。

一、中国の詩文の理解については、文字の異同を初めとして種々の解釈の考えられる場合が多い。従って、明らかな基本的誤解を原著者の了解を得て改めた他は、訳者の疑問とするところも含めて、原書の解釈のまま訳し、特に注記は施さなかった。

一、原文中、漢字の音をとってイタリック体で示した人名、地名、書名等は漢字に復元し、原注のうちそのため不要になったものは省いた。

一、漢字の意味をとって英訳された書名、官名なども同様に復元し、注は省いた。

一、外国の固有名詞の表記は、最も一般的に通用していると思われるものを採用し、必ずしも原音に忠実であることを期さなかった。

一、原著に引かれた漢詩は英訳のみで原文は付されていなかったが、翻訳にあたって原文を添えた。

一、本書に挿入した絵は原著にはないが、訳者が選択したものである。本書の内容からは、唐代以前の作品を掲げるべきであるが、本文にも言うごとく、その例は非常に稀であるので、「漢武梁祠画像石」及び「帛画」を除いては、出来る限り古式を伝えると思われる唐代以後の作品を選ばざるを得なかった。

一、文中（　）は原注番号を示し、〈　〉は訳注番号を示す。なお訳注は煩雑を避けて主なもののみにとどめ、簡潔に記した。

一、著者シェーファー氏については、巻末の訳者あとがきを参照されたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

凡　例
序……一
第一章　女性・妖精・龍……七
女性と妖精(七)　巫女(一一)　龍(一五)　蛟(一六)　女性と龍(一八)
女媧(二七)　『老子』の中の女神(四一)　神女(四四)　湘夫人(四九)
第二章　中世における大川の女神の祭祀……五五
女媧(六一)　神女(六四)　洛神(六七)　漢女(六九)　湘君(七二)
第三章　唐詩における大川の女神……八九
女媧(九二)　神女(九三)　洛神(一一六)　漢女(一二〇)　湘夫人(一二三)
第四章　李賀の詩における女神……一三七

第五章　散文物語における龍女と水神……一五三
古風な龍女(一五三)　蛟(龍)女(一六三)　海と湖の女神(一六七)　書生と川の女神とのロマンス(一七〇)　女媧(一七二)　神女(一七三)　洛神(一七五)
湘夫人(一八一)
結　語……一九三
原　注……一九七
訳　注……二三五
訳者あとがき……二三一
人名・神名索引……二四六
書名・作品名索引……二四八

装丁——道吉　剛

序

この本は女神の変容について論じるもので、中世初期の詩人や神話作家によって書きとめられたものを取り上げている。溺れた少女がどのようにして女神になり、女神がどのようにして溺れた少女に変わるのか、また文芸上の風潮の変化による世俗化につれて女神達がどのようにしてただの女性と見なされるに到ったか、さらにはそうしたイメージの衰え、と同時に隠喩の発展にも触れる。龍が虹に変じ、虹が女神に変わるということは古代中国では通説として誰もが信じる事実であった。しかしこれとても、唐代の作家達による驚くほど鮮やかな置きかえには一歩を譲るであろう。

とは言え、この本は文学をそのものとして論じたり、ある特殊な文学について語ったりするものではなく、むしろ文学の中に開拓されていった主題に捧げられるものである。もちろん、これは精緻な理論の書ではない。むしろ祭や文学、殊に人物の類型を持つ語り物や、仮面をつけた詩人その人が主

人公である抒情詩の中で、神話的主題のさまざまな具体的な現われ方を探ろうとするものである。従って文章は、ある時は歴史や文献から想像や解釈へと流れがちであり、またある時は、その時代に共通な要素に光をあてるために時代の隔った例を引こうとするだろう。つまり、時には立ち止まって、漠然とはしているが公平な「ニュー・クリティカル」の方法で、ある詩の内的な働きをとらえようとし、また別の時には、ノースロプ・フライの主唱する方法によって、一貫した原理としての古い「原型（アーキタイプ）」をつかみ出したりするつもりなのである。要するに私は研ぎすまされた理論の斧など持ち合わせてはいないのである。そこで、外観が多少とも神女らしい気分を漂わせているものに出会った時には、実を結びそうなあらゆる探り入れを用いた。この私の方法は穏当ではあるがいささか混乱を呈する接近法であったかも知れない。とにかく私は、この仕事を、その功罪がいかなるものであるにせよ、西欧の多くの中国文献研究家の間で「文学批評」などと称して通用している懦弱で無知で安易で流行にふりまわされたくだらぬ研究と結びつけたりはしてほしくない。

第一章は大まかな導入部である。ここでは中世でなく古代を扱っている。私は唐以前の文学についての権威でもなく、その上考察は非常に簡単なものである。従って、古代の龍や、女性という存在についての太古の考え方に関する私の見解は附随的意見と言うべきだろう。それらがいくらかは説得力を持つことを期待している。

〈『楚辞』〉

古代の水神についての語彙や考えの最も重要な源であり、西暦のはじめころに口承歌、特に巫術的な詠誦を文学的に翻案して集大成し公刊されたもの。[1] 恐らくは多くの人の手になったらしく実にさまざまな要素を含んでおり、古代の南部地方「楚」の国と結びつけるならわしである。その題は、ダヴィッド・ホークスが正しく指摘しているように、単に「楚の言葉」という意味であるにすぎない。つまりこれは残された断章の集大成であり、この国の文化の文学的伝統を代表するものである。ホークスはこの詞華集を翻訳する際、題を『南の歌』[2]と言い換えた。

〈巫〉

この本には覡や巫、殊に巫についての多くの言及がある。覡は依頼者のために神々に対する要求や命令を携えて霊界に旅する能力を獲得した男である。そのようにして彼らは救いと療しをもたらすことができる。巫は女性の覡であり、こうした語の性別変化は中国語において顕著である。英語では男性のシャーマンに対してシャーマンカという言葉を用いたが、これはH・R・エリス・ダヴィッドソンに負うている。[3] この本の中で最も目立った女神の一人は「巫山の神女」である。

〈黄河〉

北東チベットから砂漠を抜けて、古代中国人の故国である乾いた中原に流れ下る偉大で厄介な川は、中世には河(ガ)の川と呼ばれた。[1] 我々が黄河として知っている川である。

〈江〉

同様に偉大で深く輝かしい川。チベットから流れ出、四川(しせん)盆地を横切って目を見張るような山峡を通り、温暖で眺めの美しい中原に流れ込む。この川は初期には江(コウ)[4]の川と呼ばれていたが、やがて長い川を意味する「長江」と呼ばれるようになり、ごく最近には、特に外国人によって「揚子江」と呼ばれるようになった。

〈女神の名称〉

この本の主な登場人物は次のようである。

「神女(しんじょ)」――神性の女の意。別名「巫山の女神」。

「帝子(ていし)」――神の子供の意。彼女は湘川の女神であるが、もともと一人であると考えられる場合と、双子のうち若い方と考えられる場合がある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「湘妃（しょうき）」――湘川の妃の意。またの名を「湘娥（しょうが）（湘川の妖精）」、単数または複数の湘川の女神で、双子である場合はしばしば「女英（じょえい）（花の乙女）」と「娥皇（がこう）（輝く妖精）」という名であらわれる。

「洛神（らくしん）」――洛水の女神。

「漢女（かんじょ）」――漢水の女神。

〈女性と妖精〉

上述の題詞の中で偉才エラスムス・ダーウィン博士は雲、雨、雪、霰、露の生成についての詩的な寓意を提供してくれた。彼が水に関する様々な自然現象を女性の精霊として表わそうとしたのは、古代中国人にとっても全く自然なことに思えただろう。妖精、水の精、海の精らは、たとえ異国の見慣

れぬものであろうとも彼らの心を捉えたに違いない。そしてそれらと自分達の国に住む霧の衣をまとった乙女達や川の妃などとの間に容易に共通点を見出すことができたであろう。

ダーウィン博士には、ある意味で「科学的」な点があるが、そうしたことは中国人達には理解されていなかったはずである。従って彼の詩句は、様々な水の女神を熱心に描いた古代詩人の宋玉（そうぎょく）（あるいは彼に仮託して詩を書いた誰か）や中世詩人の李賀（りが）のそれとは非常に異なった響きを持っている。ダーウィン博士は自然界の植物や鉱物を詩の中に具体化するにあたって、それらを異教の神の姿で表現する方法を選んだ。それらは大なり小なり、中味をルネッサンスの古典的な大理石で固め、外形を啓蒙主義の鋭い水晶で形づくったものだった。例えば地下の泉が石灰質の土をくぐって、いかにして乾いた大地に「輝かしい宝」――石灰のしみこんだ水を供給するかを語る際には、この優れた学者は次の様に書いた。

おお突き通せ　妖精達よ　彼女の固い地脈を
そして彼女のあふれる泉を乾ききった草原に導け
光に満ちた谷と流れしたたる丘の遙かむこう
あまたの小川に輝かしい宝をまき散らせ(1)

宋玉や李賀と違って、ダーウィン博士は彼の擬人化した自然力に魔法の輝きを注ぎ込むことはしなかった。しかし彼らと同様彼も、女性の本性と水の循環を同等に劇的に脚色して川の女神や水の乙女

の、信ずるに足る姿を表現することができた。

八一三年の夏、唐の帝国は大洪水に苦しんだ。憲宗（けんそう）という廟号で知られている君主、李純は災害は宇宙の二元のうち陰の気の過多によるものだと考えた。不均衡は少くとも部分的には人間の力、とりわけ天子の行動によって正されるべきだったので、七月二十一日、天子は宮殿から余分の女性を二百の馬車に乗せて追放することによってその責務を果たした。[2] 女性は、抽象的な存在である水を人間の形で表わしたものであった。

これら過剰だった二つのもの――宮廷の女性と川の水――の中間には、少なくとも外観は部分的に女性であるが本性は水であるといった多くの霊的な存在がある。これらが、インドのアプサラス[2][3]のように、湖や川に出没する極東の妖精達である。彼女らの現われが目出度いものか破壊的なものかを決定するのは、通俗物語の中でのように気まぐれな偶然か、あるいは伝統的な形而上学の中で説かれたように、自然力の均衡を再び正す必然性の有無であった。そういう訳でこれらの精霊達はダーウィン博士の「その神聖な泉」[4]における健康（ヒュギエイア）の女神やもしくは驪山（れい）の薬効ある池に姿を現して秦の始皇帝のいまわしい病を治し、彼の愛人となったと伝えられる中国の仙女のように、温泉の治癒力の守護者として現われることもありうるのであった。[5]

しかしながら抽象的には、女性は中国人にとっては自然の中の豊饒、湿潤、受容の原理を象徴するものであった。彼女らは神話や文学の中では湿潤な大地や、それを潤す水系を象徴する姿として現れ

た。いずれも、男性である太陽の燃えるような繁殖力旺盛な光線と、輝かしい天空の慈悲深い影響力をよく感受するからである。女性なるものは、海や湖から水分を吸い上げ、それを雲や霧に変え、更にそれを乾いた大地に豊かに注ぐ偉大な水の循環を象徴していた。陰の気が最高に達する冬至以後の数えきれぬ出水や洪水を養分にして、女性である大地は、作物を育くむ春と夏の地熱の浸透を待つ間、生き物の萌芽達のやわらかさを守ってやる。

女性原理の宇宙的表現は、さらに多くの形態をとる。しかし、ここでは短かく触れておけば十分であろう。ラインの黄金が献身的なライン川の乙女たちを縛る魔法であったように、中国の水の精達には貴い龍の玉があった。その威力ある玉は、さらに女性と玉、そして女性と月との間の宇宙的関係をも表わしている。水の女神は別の形相では月の女神であり、もしくは月の親族を持っていた。彼女らの祭典は愛の祭典であった。[6] もっともある愛らしい月の女神は初期に独自の祭儀を発達させて、水の女神達とは別のものになっていた。にもかかわらず、いずれも、かのオベロン王[3]の「水月」の凝固した複製とも言うべき玉に対しては同じ関係を分けあっていた。玉は月のエッセンス、すなわち女性のエッセンスを凝固させたものである。それらは女性の生理的な周期と調和して、牡蠣の中に胎児の形で満ち欠けしていると考えられた。形、色、発光性のいずれにおいても、玉は月そのものの小型であった。そうして月もまた、女性なるものの天上的イメージ——凍れる水、氷——であった。女性の涙は月であり、真珠である。しかしそうした人間くさい感傷的な意味づけがいかに強くても、玉の宇宙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com